

第三九八回 醉芙蓉の巻

起句(01) 何処(いずこ)へも行かない人の醉芙蓉 果穂
 (02) この世の隅に鉦叩き打つ 恆雄
 (03) ハープ弾く老女の指の音冷えて 松陽
 (04) 新洪匂う番傘広げ 笈羅
 月(05) 枝折戸(しおりど)を開けて親しき月の宿 和子
 折端(06) 伝南州の額は朦朧 七緒
 折立(07) 隣家との境かき消し雪はげし 笈
 恋(08) 時計台の下待つ娘(こ)水洩 松
 (09) 北大でチェーホフ主役奪い合い 七
 (10) 通知表では5も均(なら)されて 和
 (11) 鈍才が夏期講習で目を覚ます 松
 (12) いばら姫には王子がスイツチ 七
 月(13) 月明かり白き裸身の浮くごとく 笈
 (14) 強風に怯え風呂に水張る 松
 (15) 観潮船渦高ければ声上がり 和
 (16) 何くわぬ顔榮螺動かず 恆雄
 花(17) 決壊堤花見までには戻るらむ 七
 折端(18) まず芽を出すは土筆たるべし 和
 折立(19) 幼児(おきなご)のしゃぼん玉吹き追いかける 松
 (20) 客呼び寄せるあの手やこの手 笈
 (21) 麦酒(むぎざけ)や甘酒に飽き梅酒へと 恆
 (22) 野外映画に蚊をたたきつつ 松
 (23) 夜鷹鳴く急に仲良し帰り道 和
 (24) 試合流れたカナダとナミビア 七
 (25) 川岸にもとの賑わい鰻籩 笈
 恋(26) 看板女将(おかみ)に贈る山葡萄 和
 (27) ゲンセンカン柚の実香る掛けながし 七
 (28) 薄闇透かし落雁しきり 恆
 月(29) 長唄の静かに響く月今宵 松
 折端(30) 鰻頭前についてとうとうと 笈
 折立(31) 凧に向かって深く被る帽 恆
 (32) 泉が誘うよくわばらくわばら 七
 (33) 水温むかくれんぼうに散らばって 和
 (34) 姉の造りし露味噌の味 松
 花(35) 靈廟の岩戸の隙に花の影 恆
 (36) 蕨摘む日ももうすぐそこに 笈

連衆・果穂、恆雄、松陽、笈羅、和子、七緒
 2019・10・17 於 都内某所